PDCAサイクルを回して安全衛生活動の推進を図る

(株)長南工務店(本社／東京都)の取組み

PDCA（計画・実施・評価・改善）サイクルを安全管理に導入し、安全衛生活動の見直しと改善を図り、労働災害防止のさらなる向上を目指す。PDCA効果で無事故を継続中。また、職長達には、職長会活動への参加を奨励し、安全意識の向上に大きな効果をもたらしている。（編集部）

株式会社長南工務店は、東京都国分寺市に本社を構える型枠専門工事会社である。本社のほかに資材を管理する埼玉支店や、都下の多摩加工場及び瑞穂加工場などを擁する。従業員数は、社員32人、外注型枠大工約300人、外注型枠解体工約100人など。会社設立は昭和39年、東京オリンピックが開催された年である。

「私は二代目です。先代は、鉄道建設興業（現・鉄建建設）の子飼いの型枠大工で、職長を任されていました。東京オリンピック関連の工事が終わり、鉄建さんのバックアップにより独立し、会社組織にしました」と三浦勉代表取締役社長は会社設立の経緯を語る。

その後、団地建設ブームが到来。数多くの団地を手がけて会社の礎を築き、新幹線の整備や駅ビルなどの建設工事も担当してきた。「当時の新幹線・品川操車場の整備は相当な工事量があり、3年くらい続きました」と、三浦社長は往時を振り返る。

現在は、マンションの工事を主体として事業を展開。最近では、長谷工コーポレーション発注の「公務員宿舎小金井住宅」（小金井市）や「吉祥寺レジデンシア」（武蔵野市）、清水建設発注の「国立音楽大学新施設」（立川市）などの工事を手がけている。

公務員宿舎小金井住宅は、RC造の地上7階建て、総戸数985戸という巨大な現場であった。吉祥寺レジデンシアは、RC造の地上8階建て、総戸数208戸の分譲マンション。国立音楽大学新施設は建設中の物件であり、間もなく竣工の予定となっている。

安全衛生活動をPDCAサイクルで展開

同社のモットーは「信用第一」。三浦社長は、「私たちの業界は、基本的に請け負い業です。安全をしっかり確保して、きちんとした仕事をしなければ、得意先である元請さんの信用を得ることはできません。先代からずっと築き上げてきた信用を失えば、継続的に仕事を頂くことは厳しいでしょう」と、信用の大切さを強調する。

安全衛生活動は、「従来から行っていた取り組みを、PDCA（計画・実施・評価・改善）サイクルに乗せて実施しています」（三浦社長）と、継続的な改善の手法を取り入れた。

まず、1年間の安全衛生活動における安全衛生基本方針と安全衛生目標を決定し、社員はじめ、協力会社に周知徹底を図る。平成22年度の安全衛生基本方針は、「『人命尊重を基本理念』と考え、働く作業員の安全と健康を確保する」を掲げた。この方針のもと、安全衛生目標として、「墜落・転落災害の防止」と「電動工具災害の防止」の2点を掲げ、すべての作業所で災害ゼロを目指した。

次に、安全衛生計画の作成に着手。安全衛生目標の達成に向け、重点実施事項とし

本社ビル

三浦勉社長

儀間崇俊工事課長

最近の施工実績

（いずれも長谷工コーポレーション第93期報告書より）

公務員宿舎小金井住宅

吉祥寺レジデンシア

て、安全衛生管理体制の確立・強化や、安全衛生教育の計画的な実施、作業所における安全衛生活動の強化などを検討し、計画に盛り込んでいく。同社では、安全衛生パトロールをはじめ、安全衛生推進大会、職長・安全衛生責任者教育、リスクアセスメント教育など、さまざまな取り組みを実施している。

特に、安全衛生教育では、安全帯ぶら下がり体感や、安全ネットによる墜落衝撃体感など、危険を擬似体験して安全意識を高める社外の「安全体感教育」にも積極的に参加している。

また、安全祈願のため、毎年、伊勢神宮を参拝。「信心深かった先代が始めました。新年会を兼ねて、1泊2日で実施しています」と三浦社長。

続いて、安全衛生活動を実施した結果の評価は、三浦社長をはじめ、役員・社員・協力会社社長・職長が参加する安全衛生委員会で行う。安全衛生パトロールの結果の分析や安全衛生教育の実施状況の確認、協力会社の安全衛生能力の評価などを行い、作業計画や作業手順の見直し、労働災害防止対策の周知と水平展開を図るなど、改善につなげ、翌年の安全衛生計画に反映させているわけだ。

このように、安全衛生活動をPDCAサイクルを回して見直してみると、それぞれの目的や関連が明確になり、不足している項目や強化すべき内容も見えてくる。

「元請さんの指導のもと、当社でも工夫してPDCAを活用することにより、お陰様で、ここ3年くらい無事故を継続しています」と三浦社長は力強く語る。

安衛パトロールの結果、施工方法の変更も

安全衛生パトロールには、三浦社長も必ず参加し、役員・社員・職長らと共に7人編成で月1回、現場2個所を点検。

「まず、場内が整理整頓されているかどうかチェックしています。きちんと整理整頓されている現場は、所長さんをはじめ、作業員みんなの顔の表情がイキイキとしています。よくやっているなと、すぐに分かります」と三浦社長は強調する。

点検項目には、足場や脚立などの設備をはじめ、工具関係や「Xシートは使用しているか」といった事項もある。

安全衛生担当の儀間崇俊工事課長は、「型枠大工は、インパクトドライバー、丸のこ、ドリル、釘打機など多くの工具を扱っています。それらの安全確保と適正使用のため、現場持込み時の点検と許可の確認、丸のこなどの安全カバーの確認、三芯使用の確認などを行っています」と、工具関係について説明。〝三芯使用〟とは、電動工具での感電を防ぐアース付きコンセントの使用をいう。

「Xシートは、現場の明かり取り用に使う、透光性がある化学合板の型枠です。すべてベニヤ材だと部屋の中が暗くなってし

リスクアセスメント教育の模様

安全体感教育の模様――安全ネットにおける墜落衝撃体感（高さ５ｍからタックルバッグを落とし、安全ネットにどのくらいの衝撃力がかかるかを体感）写真上は、安全帯ぶら下がり体感（安全帯を着用して、腰と腹部に掛けた場合、負荷がどのくらいかかるか体感する）

安全衛生パトロールの模様

まい、作業しにくいため、１部屋に最低１～２枚使用するようにしています」（儀間課長）。同社が施工する現場では、Ｘシートを１００％使用しているが、業界ではまだ普及率は高くないようで、元請や同業他社から見学者が訪れるという。

安全衛生パトロールが終了すると、三浦社長も参加するミーティングで、点検結果の採点と講評を行う。パトロールの結果をもとに、施工方法を変えたこともある。

「階段を施工するとき、セパレーターという緊結金具を使います。従来は、コンクリートが打ち上がったとき、それが階段の踏み面に飛び出ていました。あとで、その部分を折っていたのですが、折り忘れもあり、安全に支障をきたすため、飛び出さないように施工方法そのものを工夫しました」（三浦社長）。

職長会への積極的な参加を奨励

安全衛生推進大会は、協力会社で組織する「長和会」の協賛により開催。社長表彰、グループ表彰、個人表彰、安全衛生スローガンの発表、職長会活動奨励賞の授与、安全の誓い、安全講話などにより、従業員の安全衛生意識の高揚と定着を図っている。

安全衛生スローガンは、安全・健康・環境の３部門で募集し、優秀作品を選定。毎年５００ほどの応募があり、平成22年度のスローガンとしては、「声を出せ　声を掛け合え　声を聞け　みんなで築く安全職場」（安全）、「こまめなチェックで健康管理　元気な身体が支える職場」（健康）、「分別は誰でもできるエコ活動　ストップ資源のムダ使い」（環境）が選ばれた。大会では、これらのスローガンを垂れ幕にして掲示。さらに、周知徹底を図るため、スローガン入りのオリジナルタオルを作り会場で配布している。大会の最後は、スローガンの全員唱和で締めくくる。

職長会活動奨励賞は、職長会の役職を担い、活発な活動を展開した職長に授与している。「職長に一番奨励しているのが、現場の職長会活動への積極的な参加です。職長に、職長会の会長や副会長などの役職を担い、現場の安全衛生活動に率先して協力するよう後押しをしています」と三浦社長。

奨励の理由として、三浦社長は、型枠の仕事が躯体工事の中で一番大きな割合を占めていることを挙げる。「例えば、鉄筋屋さんは、現場に資材を搬入し施工すれば、それで仕事が終わります。ところが、型枠の場合は、現場に資材を持ち込み、組み立てて、躯体が出来上がったら、今度は組み立てた資材を解体し、現場から運び出さなければなりません」（三浦社長）。型枠大工は、他職種と比べて作業量が多いため、当然、職長は元請の現場所長と接する機会も多くなる。「そこで、当社の職長たちが中心的な役割を担い、先頭に立って現場を取りまとめるほうがよいと思ったからです」と三浦社長は語る。

PDCAサイクルを回して 安全衛生活動の推進を図る

しかし、「ハイ、やります！」と、自発的に手を上げる者は少ない。「最初は『仕方ないからやるか』という感じがありました。私達も社長の方針に基づき、職長会へ積極的に参加するよう言うため、うるさいなと思ったはずです。しかも、職長さんは私達より年配の人が多いため、なおさらでしょう。私達たちも根気強く奨励する必要がありました」と語る。

ところが、2～3個所の現場で職長会活動に取り組むうち、職長の意識が変わったという。「安全、衛生、品質、さらには原価管理にまで、幅広い範囲の責任感が芽生え、自発的に職長会へ参加するようになり、提案型の相談が増えました」と、三浦社長は手応えを感じている。

安全衛生推進大会の当日、大会前に本社で健康診断を実施
採決、レントゲン、尿検査、心電図、問診をはじめ、メタボチェックも行う

健康づくりにゴルフを活用

安全衛生推進大会当日の午前中、会場に移動する前に本社で健康診断を実施。「長年にわたって特定の診療所にお願いし、医師、看護師、スタッフなど総勢約30人に検診車2台で来てもらい実施しています」と三浦社長。再検査と診断された者は、健診を受けさせ、その結果を報告するまで現場には入れないルールとなっている。

また、健康管理の一環として、社員や職長にゴルフを奨励しており、山梨や埼玉のゴルフ場で年2回、ゴルフコンペを開催。

「ゴルフは、普段使っている筋肉とは別の筋肉を動かすため、筋力アップにつながります。また、コミュニケーションを図ることもできます。さらに、元請さんも現場単位でゴルフコンペを行っているところもあり、ゴルフをしていれば、そうした機会に参加することができ、現場の交流を深められます。健康管理と併せて、まさに『一石三鳥』です」と、三浦社長はその効用を語る。ゴルフの本格的な奨励は10年ほど前から始まり、今ではほとんどの社員、職長がプレーを楽しんでいるという。

当たり前のことを一生懸命に

PDCAサイクルを活用したり、職長会活動への参加を奨励したりして成果を上げ、元請の信頼を得ている同社。何か秘訣はあるのだろうか。

「『凡事徹底』という言葉がありますが、ひと言でいうならばこれに尽きます。当たり前のことを当たり前にやるのではなく、当たり前のことを一生懸命にやることが大切です」と儀間課長。例えば、「職人の中にも、日常の挨拶や朝礼、体操、整理整頓などについて、こだわりを持って一生懸命取り組んでいる人がいます。そういう当たり前のことを毎日、徹底して行っている人を評価しています」という。安全衛生管理の手法も、取り組む人の意気込みや、こだわりがあって初めて活きるわけである。

安全衛生推進大会の最後は、安全・健康・環境の各スローガンを参加者全員で唱和